

ネムネムの木の実

なにごととも最初が肝心と言いますよね、一事が万事、全ては最初の一步で大勢が決まってしまうものです。

遠く高く険しいどこかの山に、不思議な木の実がありました。

その木の実は、ネムネムの木に成るネムネムの木の实、誰も見たことがない美しい色、誰も触れたことのないその形、そして誰も感じたことのない馨しい薫がするといいます。

そのネムネムの木の実をひと口食べるとひととき前に、ふた口食べるとふたとき前の自分に戻ることができるといえます。

でもそれは若返り、ではなく、自分が食べたその口分だけ逆上ったあの時からやり直しができるのです。

伝説を信じ、人生そして命を賭けてネムネムの木の实を見つけた探求者には、最後の決断が待っています。

「確かに、自分にとっては全く見たこともない色、触ったことのない形、そして初めて知るこの薫、だがそれだけでこれが伝説の木の实だという保証は、どこにもない」

そう、この決断を誤り、多くの探求者たちは毒の木の实で命を落としたり、逆に手に取りながらもこの幸運を捨て去ったりしていったのです。

しかし、倖いにも勇気をふり絞ってネムネムの木の实を食べた者は、途端に一瞬記憶を失っていくという恐怖を味わいつつ、同時に時を逆のぼっていくといえます。

果たして気がつけば、自分が今なにに恐怖していたのか、いやその恐怖していたことすら忘れ、呆然と立ち尽くしているのです。

「あれ、自分は今なにを……………」

しかし、不思議な木の实だけは戻ったその時その手に、先ほどカジった分だけ失われ、握られて続いています。

そして怪訝にネムネムの木の实を目にして、人ははたと気がつくのです。

「……………あ、自分は今、時を戻ったんだ」

人はその時、誰もしが最上の喜びを実感することでしょう。

誰もが一度は感じる後悔、あの日あの時あの瞬間、自分のした行動、あるいはしなかった行動についてのそれを、挽回するチャンスを得たのですから。

「よし、戻ろう。あの時へ」

そしてひと口、またひと口とネムネムの木の实を食べ続け、人はあの時へと戻っていくのです。

……………そう、戻るだけ。

戻るのは一瞬、だけど進むのは一瞬じゃない。

だからこそ戻る意義があると思う者もいれば、思わない者もいる。

だけど、そんなことを気にしていても始まらない、ネムネムの木の実の効果を経験した者にとっては。

あの日へ、あの時へ、あの瞬間へとだけ思い、木の実はどんどんどんどん小さくなり続け、……………いつしかなくなります。

人は、あの時に戻れたのでしょうか。

いえネムネムの木の実がなくなるまでにその時に戻れた人は、多くはありません。

だって、まずそのネムネムの木の実を捜すことに賭けた人生の長い長い日々を戻らなくてはならないのです。

だから。

「俺の戻る時はあまりに長いから」

と言って袋いっぱいネムネムの木の实をかっつき、両の手に腕に抱えて持っても、残念なことと一緒に戻ってくれる木の实はひと口カジったそのひとつだけ。

しかも、戻ったその時には、たくさん木の实を持っていたことなぞ綺麗さっぱり忘れていて、そしてただ。

「自分はなぜたくさん持って帰ろうとしなかったんだ」

と後悔するばかりなのです。

でも、それはそれで幸運なのかもしれません。

木の实捜しに費やした貴重な人生のいくばくかを、取り戻すことができたのですから。

そして、他の道を進めばいいのです。

ただ、それに気づく人が余りに少ないだけです。

木の实を食べきってなくしてしまった人は、時を戻ったという事実を知らしめる木の实を手に握っていないのです。

「あれ……………!? 自分は今寝とぼけていたのか？」

その程度に思い、結局木の实捜しを続けるだけなのです。

木の实がまだ手の内にある人も前述のように欲張って。

「しまった、たくさん取っておいたらよかった」

と、また木の实を取りに行こうとするのです。

……………が。

「ここにあるのはネムネムの木の实、だけどどこにあったんだろうか？」

そうです、一緒に戻るのは木の实だけ、記憶までは戻っては来ないのです。

しかも、疑り深い者だと。

「いや、これは本当にネムネムの木の实なのか……………」

カジった跡があっても自分がカジったその記憶は戻ってきていないのです。

でも、確かに全く見たこともない色、触ったことのない形、感じたことのない薫の木の实を手にしていることに気づき、探求者はまた、あの決断を迫られることになるのです。

そう、その時こそ探求者は決断者となり、そして永遠の探求者へと変わっていくのです。

でもさっきはカジったのに、今度は臆病風に吹かれてしまうこともあるのですが。

「ダメだ、これは違うに違いない」

だからこそ、どの時代でもネムネムの木の实は誰も知らない幻の木の实。

だからこそ、探求者たちもネムネムの木の实を捜し続けるのです。

……………けど、もしかしたらネムネムの木の实を見つけ出し、時を戻ったそのことを知らずに捜し続けている探求者たち。

でも、それはネムネムの木の实以外誰も知らないことなのです。

ほら、あなたも思ったことがあるでしょう。

「あの時に戻ってやり直したい、だから……………」

……………けれども、あなただけでもネムネムの木の实を捜そうとは思わないことです。

捜そうと思うその最初の一步、それさえ踏み出さなければいけません。

踏み出したが最後、あなたはもう時の流れを行きつ戻りつする、永遠の探求者になってしまうのですから。

おしまい